

共想法談話の脱文脈化観点からの検討

田中 弥生
神奈川大学・国立国語研究所
yayoi@ninjal.ac.jp

小磯 花絵
国立国語研究所
koiso@ninjal.ac.jp

大武 美保子
理化学研究所
mihoko.otake@riken.jp

1 はじめに

本発表は、共想法による談話の特徴を脱文脈化程度の観点から検討するケーススタディの報告である。共想法は、高齢者の認知的健康につながる会話を確実に発生させることができるよう工夫を加えた会話支援手法で、(1) あらかじめ設定されたテーマに沿って、自身で準備した写真やイラストとともに話題を数人の高齢者が持ち寄り、(2) 参加者全員のもち時間を均等に決めて、話題提供する時間と、質疑応答する時間に分けるという二つのルールに沿って「話す」「聞く」「質問する」「答える」のバランスをとりながら行われる [1] というものである。回想法が過去の経験を語るのに対して、共想法では現在の視点が語られる [2]。現在を中心に過去から未来までテーマを設定することで、常に新しい話題を見つける習慣を身に付けることを目指すものである。

脱文脈化程度とは、コミュニケーションが行われている「今ここ」の時空とその発話内容との、時間的・空間的距離の程度をさす。脱文脈化の観点からの分析には、修辞ユニット分析¹⁾[5]の分類法を用いる。発話機能 (speech function)、中核要素 (central entity)、現象定位 (event orientation) の認定の組み合わせから修辞機能と脱文脈化程度を知ることができ、談話や文章においてどのような修辞機能が用いられているか、使用されている言語表現は脱文脈化程度が高いか低いか(「今・ここ・わたし」から遠いか近いか)、という観点からの検討が可能になる。これまで、手順を説明する場面や取引先との打ち合わせなど様々な談話の分析を行い、目的や話題内容、状況による、談話やテキストの脱文脈化程度の様相の検討を行ってきた [6, 7]。

本発表では、共想法による談話の特徴を考慮した脱文脈化程度の観点からの分析について検討し、1) 話題提供の時間と質疑応答の時間では発話の

1) Rhetorical Unit Analysis [3, 4] を日本語に適用したものである。

修辞機能・脱文脈化指数は異なるか、2) テーマによって修辞機能・脱文脈化指数は異なるか、の2点について、確認する。

2 分析対象と分析方法

2.1 分析対象

2019年度に行われた共想法11回のうちの2回を今回の分析対象とした。それぞれの回のテーマは、「私の好きな色」と「平成から令和」である。「私の好きな色」は個人の嗜好に関わる話題のため、脱文脈化程度の低い、より文脈化した表現が用いられる可能性があり、「平成から令和」はテーマ自体は個人とは関わりがないため、脱文脈化程度の高い表現が用いられる可能性がある。表1に参加人数²⁾を示した。録音データを文字起こししたものを分析対象データとして使用した。³⁾

表1 テーマと参加人数

実施時期	テーマ	セッション	人数
2018年12月	私の好きな色	A	3
	私の好きな色	B	3
	私の好きな色	C	4
2019年5月	平成から令和	D	4
	平成から令和	E	3
	平成から令和	F	3
延べ人数			20

2.2 分析方法

修辞機能と脱文脈化指数の確認には、修辞ユニット分析⁴⁾[5]の分類法を用いる。以下に概要を述べる⁵⁾。手順として、1. 分析単位となるメッセージ(概ね節)に分割してその種類を特定し、2. 発話機能(提言か命題)・中核要素(状況内、状況外、定言)・現象

2) セッションAとBはスタッフが一名ずつ参加しており、それぞれ4名であったが、スタッフの発話は分析対象外とした。

3) セッション名は本発表のために付与したものである。

4) Rhetorical Unit Analysis [3, 4] を日本語に適用したものである。

5) 詳細は [8, 9, 5] を参照のこと。

定位(過去、現在、未来、仮定)を認定し、その交差から、3. 修辞機能の特定と脱文脈化指数の確認を行う。以下に概要を示す。

2.3 分析単位への分割と種類の認定

分析単位の「メッセージ」は概ね節に相当し、4つの種類に分類する。相槌や定型句、述部がなく復元ができないものや挨拶などは「位置付け」で、このあとの分類の対象とはならない。従属節のうち⁶⁾、理由や条件などを表しているものは「拘束; 意味的従属」に該当し、単独では分類しない。それ以外の従属節は「拘束; 形式的従属」に分類し、主節の「自由」とともにこのあとの分類を行う。

2.4 発話機能・中核要素・現象定位の認定

メッセージの種類が「拘束; 形式的従属」及び「自由」と認定されたメッセージについて、発話機能・中核要素・現象定位を認定する。表2に示したように、これらの組み合わせから、修辞機能と脱文脈化程度が特定される。

表2 発話機能・中核要素・現象定位からの修辞機能と脱文脈化指数

		発話機能						
		提言	命題					
			現象定位					
			現在		過去	未来		仮定
中核要素	状況内	参加	1 行動	7 自己記述	3 状況内回想	4 計画	5 状況内予想	
		非参加	2 実況	8 観測				
	状況外	n/a	9 報告	13 説明	10 状況外回想	11 予測		12 推量
		定言	n/a	14 一般化				



図1 脱文脈化指数

表2と図1の数字は脱文脈化指数で、図1に示すように、その会話の場(今ここ)に最も近い(脱文

6) 連体修飾節は独立したメッセージとしては扱わない。

脈化指数が低い)ものから、最も遠い(脱文脈化指数が高い)ものまで配置されている。発話機能は「提言」か「命題」に分類する。「提言」は「その本を取ってください」のような、会話当事者がいるその場での品物・行為の交換に関する提供・命令で、修辞機能が【行動】、脱文脈化指数が<1>⁷⁾と、この段階で特定される。最も脱文脈化指数の低い発話である。「命題」は、情報を交換する陳述・質問が該当し、このあと中核要素と現象定位を認定する。

中核要素は、基本的に主語によって表現され⁸⁾、「状況内」「状況外」「定言」に分類する。「状況内」は、中核要素がメッセージの送り手や受け手のいる場に存在する人や事象の場合に該当し、下位分類としてメッセージの伝達に参加している送り手・受け手を「状況内; 参加」、参加していない人や事象は「状況内; 非参加」に分類する。「状況外」は、中核要素がその場に存在しない人や事象の場合である。「定言」は、普遍的な性質などを述べているメッセージの主語が該当する。中核要素が省略されている場合には復元して認定する。

現象定位は基本的にテンスや時間を表す副詞などによって表現され、「過去」「現在」「未来」「仮定」に分類する。メッセージの内容がすでに起こった出来事であれば「過去」、その時点で起こっていることであれば「現在」となる。「現在」は、普遍的・習慣的か、一時的かの下位分類がある。まだ起こっておらず、これから起こる事象は「未来」で、意図を持って実行できるか否かによって「未来; 意図的」か「未来; 非意図的」に分類する。なんらかの条件のもとで出来事が起こる場合には「仮定」に分類する。

発話機能・中核要素・現象定位の分類後、表2から修辞機能と脱文脈化指数を確認する。なお、これらのアノテーションは筆者の一人とこの分類法を熟知している作業者の二名で行い、認定が分かれた場合には必要に応じて検討し、最終的には筆者の一人が決定した。

3 分析結果と考察

図2、図3にセッションごとの修辞機能・脱文脈化指数の出現をグラフで示した。図2の「私の好きな色」の「話題提供」では、【実況】<2>、【自己記述】<7>が多く用いられていることがわかる。これは、提供する話題が「私の好きな色」であることか

7) 以下、修辞機能を【】で、脱文脈化指数を<>で示す。

8) 主題が中核要素になる場合もある。中核要素の認定基準を現在検討中である。

ら、自分自身に近い話を述べる必要があるためと考えられる。「私の好きな色」の一つのセッションの「話題提供」を表3に示した。「この写真は今、今日ここで撮りました。(命題&状況内;非参加&現在;非習慣・一時的)【実況】<2>」から始まり、写真に写っているものの紹介【観測】<8>がなされ、後半には、撮影したものに関する一般的な説明【説明】<13>も含まれているが、自分の好きな色の紹介【自己記述】<7>、撮影したものに関する自分の習慣【自己記述】<7>のように、ほとんどが自分自身にかかわることについて述べられている。

一方、同じテーマ「私の好きな色」でも、「質疑応答」においては、【説明】<13>や【観測】<8>が多く用いられている。例えば、「濃紺で素敵ですよ。(命題&状況外&現在;習慣的・恒久)【説明】<13>」、「紺って落ち着きますよね。【説明】<13>」 「紺の背広は少し着古してくると光ってくるんですよ。【説明】<13>」のように、一般的な話題の発話である。また、「手をふくハンカチなんです。(命題&状況内;非参加&現在;習慣的・恒久)【観測】<8>」 「素敵なプレゼントですね。【観測】<8>」 「あれ 手袋って長いんですか。【観測】<8>」 「わりにこの辺までありますね。【観測】<8>」 「かっこいい犬ですねー。【観測】<8>」のように、写真に写っているものについての質疑応答が交わされている。

次に、図3に示したテーマ「平成から令和」の「話題提供」をみると、【状況内回想】<3>が多く用いられている。これは、自分や対話の相手、及びその場にあるものを主語にして過去形で話している場合が該当する。たとえば、「僕は東京ドーム行ったんですね。(命題&状況内;参加&過去)【状況内回想】<3>」や「両方から これ写真撮りましたんで【状況内回想】<3>」のように、写真を撮った場所や撮った行為について述べるものがある。また、【状況外回想】<10>の使用も見られる。これは「(東京ドームは)昭和の最後 千九百八十八年に出来上がって(命題&状況外&過去)【状況外回想】<10>」や、「この モニュメントがあったもんですから。【状況外回想】<10>」、「ま 人がいっぱいいたんですけども【状況外回想】<10>」のように、主語が共想法を行なっているその場にはなく、時制が過去の場合に該当する。これらの発話は、この「平成から令和」というテーマの場合には、話題を提供するために必要な素材である写真をどのように撮影したかについてや、その撮影の際の出来事が語られてい

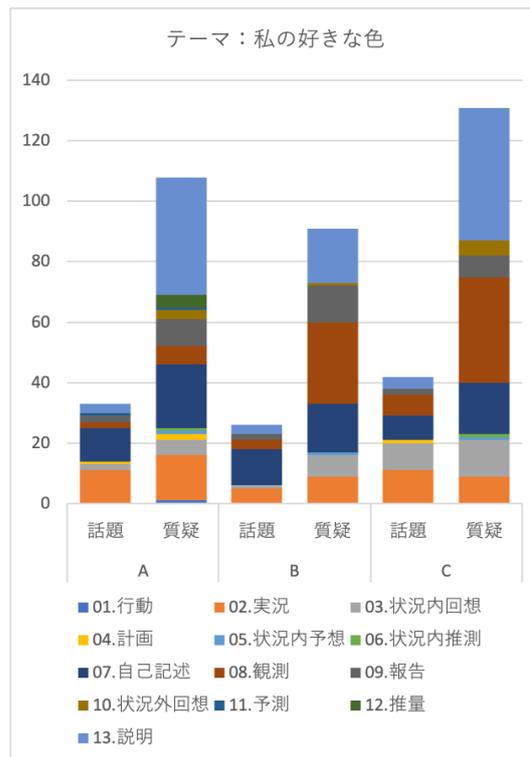


図2 「私の好きな色」セッションごとと修辞機能・脱文脈化指数

るためと考えられる。「私の好きな色」の場合とは異なる点である。

さらに、図3の「平成から令和」の「質疑応答」をみると、【観測】<8>、【説明】<13>、の使用が多く見られる。例えば、「まん中はなんですか。(命題&状況内;非参加&現在;習慣的・恒久)【観測】<8>」や「(この文字が)令和に見えるんですよ。【観測】<8>」のように、話題として提供された写真の中のものをそこにあるものとして質問したり、回答したりしているものや、「〇〇神社ってゆうのはどの辺にあるんですか。(命題&状況外&現在;習慣的・恒久)【説明】<13>」や「(その神社は)普段はね あんまり人が来ない【説明】<13>」のように、その場にはないものについて詳しく説明を聞いたり補足説明したりするものが含まれる。これらは、「私の好きな色」の「質疑応答」でも同様であった。「平成から令和」のセッションDとセッションEでは、「質疑応答」で【状況内回想】<3>も用いられており、「東京駅は なに 入場券買って入ったんでしょ。(命題&状況内;参加&過去)【状況内過去】<3>」 「で あのー そうですね。東海道線のあのあたりのホームに行ってみたんですね。【状況内過去】<3>」 「な なんて東京駅。(を選んだの?)【状況内

表3 「私の好きな色」の「話題提供」から

発話	発話機能	中核要素	現象定位	修辞機能	指数
この写真は今、今日ここで撮りました。それでこれは何かというと、パプリカですね。わたくしは なんでも衣類でも赤が好きで、赤いパプリカを冷蔵庫から持ち込んできました。あの、漬物っていうか、えっといろいろ切っているも食べられるようにしております。それで、サラダとか、生にそのまま生でサラダとかして食べたりもしております。まあ、黄色とか、いろんな色もあるんですけども、強いて、赤が好きなので、赤を持って参りました。	命題	状況内; 非参加	現在; 非習慣・一時的	【実況】	<2>
	命題	状況内; 非参加	現在; 習慣的・恒久	【観測】	<8>
	命題	状況内; 参加	現在; 習慣的・恒久	【自己記述】	<7>
	命題	状況内; 参加	現在; 非習慣・一時的	【実況】	<2>
	命題	状況内; 参加	現在; 習慣的・恒久	【自己記述】	<7>
	命題	状況内; 参加	現在; 習慣的・恒久	【自己記述】	<7>
	命題	状況外	現在; 習慣的・恒久	【説明】	<13>
	命題	状況内; 参加	現在; 非習慣・一時的	【実況】	<2>

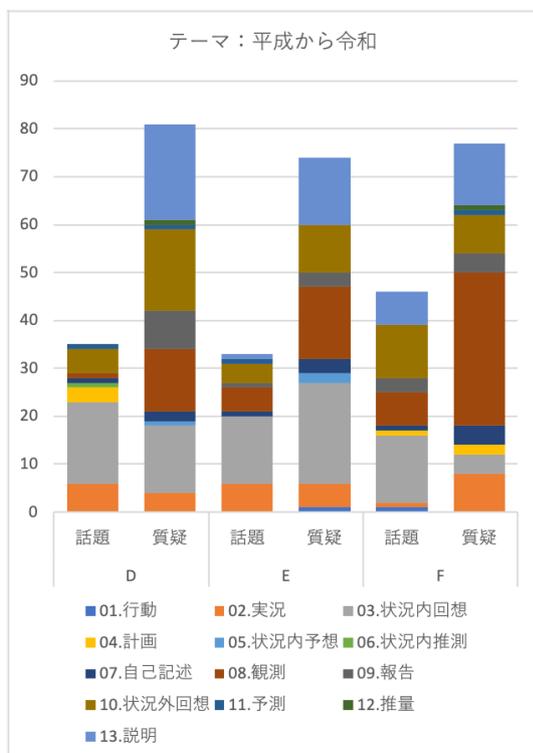


図3 「平成から令和」セッションごと修辞機能・脱文脈化指数

過去】<3>」のように、「話題提供」では話されなかったことの確認などがされている。

4 おわりに

本発表では、共想法による談話の特徴を脱文脈化程度の観点から検討するケーススタディの位置付けとして、分析を行い、1)「話題提供」と「質疑応答」では発話の修辞機能・脱文脈化指数は異なるか、2) テーマによって修辞機能・脱文脈化指数は

異なるか、の2点について、確認を行なった。

分析の結果、「話題提供」と「質疑応答」では、「質疑応答」のほうで【説明】<13>が用いられるようになるなど、使用される修辞機能・脱文脈化指数に違いが見られた。また、「平成から令和へ」という個人と直接関係のない一般的な話題のテーマでは、【自己記述】<7>が少なく、「私の好きな色」という個人の好みについて述べる脱文脈化程度の低い発話が生じることが予想されるテーマとは、使用される修辞機能・脱文脈化指数に違いがあることがうかがえた。発話において脱文脈化の程度が偏らないことが脳の活性化につながり認知症予防の観点から良いと仮定した場合に、話題によっては脱文脈化程度が偏りうるため話題の選択をうまく調整する必要があること、また話題の提供では偏る場合においても質疑応答する中で脱文脈化の程度に広がりを持たせることが可能であることが示唆された。

本発表での報告は、ケーススタディであり、今後さらにデータを増やして、脱文脈化程度の観点からの、共想法談話の特徴を明らかにしていきたい。また、特定の個人の発話の特徴の有無について調べることにより、共想法の進め方に知見を提供できればと考えている。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP19K00588, JP18KT0035, JP20H05022 の助成を受けたものです。共想法に参加頂いた方に感謝申し上げます。

参考文献

- [1]大武美保子. 介護に役立つ共想法: 認知症の予防と回復のための新しいコミュニケーション. 中央法規出版, 2012.
- [2]大武美保子. 認知症予防回復支援サービスの開発と忘却の科学. *人工知能学会論文誌*, 25(5):662–669, 2010.
- [3]Carmel Cloran. *Rhetorical units and decontextualisation: An enquiry into some relations of context, meaning and grammar*. PhD thesis, University of Nottingham, 1994.
- [4]Carmel Cloran. Contexts for Learning. In *In Pedagogy and the Shaping of Consciousness: Linguistic and Social Processes*, pages 31–65. Cassell Academic London, 1999.
- [5]佐野大樹・小磯花絵. 現代日本語書き言葉における修辞ユニット分析の適用性の検証 – 「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係 –. *機能言語学研究*, 6:59–81, 2011.
- [6]田中弥生・浅原正幸・小磯花絵. 手順説明談話における脱文脈化の諸相. *言語処理学会第26回年次大会発表論文集*, pages 720–723, 2020.
- [7]田中弥生・小磯花絵. 脱文脈化の観点からみる職場における取引先との談話の特徴. In *言語資源活用ワークショップ発表論文集*. 国立国語研究所, 2020.
- [8]佐野大樹. 日本語における修辞ユニットの方法と手順 ver.0.1.1—選択体系機能言語理論 (システム理論) における談話分析— (修辞機能編), 2010.
- [9]佐野大樹. 特集選択体系機能言語理論を基底とする特定目的のための作文指導方法について—修辞ユニットの概念から見たテキストの専門性. *専門日本語教育研究*, (12):19–26, 2010.